



Title	『咸陽宮』絵巻攷：冒頭部の漢籍利用を中心に
Author(s)	中本, 大
Citation	語文. 1993, 60, p. 10-23
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68854
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『咸陽宮』絵巻攷

—冒頭部の漢籍利用を中心にして—

中 本 大

『咸陽宮』絵巻は周知のことく、『平家物語』等に見える咸陽宮における秦の始皇帝と燕の太子丹の説話に取材した室町時代物語である。『平家物語』諸本の咸陽宮説話については数多の先達の研究がある。中でも黒田彰氏の論考は、後代の受容までも視野に入れた精緻を極めたもので、『咸陽宮』絵巻の研究の上でも大変有益である。⁽¹⁾しかし、室町時代後期以降の成立と目される『咸陽宮』絵巻の内容と『平家物語』の説話内容を比較するのみでは、大きく時代を隔てる二作品の価値を十分称揚することはできないであろう。

例えば、徳江元正氏が指摘することなく、室町時代末の五山禪僧、惟高妙安の記した抄物『詩学大成抄』の「郊園門」には、次の文辞が見受けられる。

始皇ノ夫人ニ、華陽夫人ノ荆軻カ始皇ヲ打トテ、トリコメテ難儀ノ時ニ、后ノコトヒキソ、七尺屏風躍何不越ト云詞ヲ曲ニヒカレタラキイテ、屏風ヲハネコシテ、ニゲラレタソ、平家ニモカタルソ、史記ノ始皇本紀ニハ平家ノヤウニハシルサヌソ、始皇ハ、大力、ハヤハザノ人ナリ

〔郊園門〕

「燕の太子丹の差し向けた刺客、荆軻と秦舞陽に迫られた始皇帝は、いまわの際に鐘愛の夫人、華陽夫人の琴の音を聽かんことを乞い、許されるが、その琴音に心を強くし、危うく難を逃れた」という物語のクライマックス部分に言及したこの記述、興味深いのは、「史記ニハ平家ノヨウニハ記サヌソ」という部分である。惟高ほどの学僧であれば、華陽夫人は始皇帝の妃ではなく、始皇帝の母后であったことは当然理解していたに相違ない。しかし、原典、「華陽國」の注釈の中で彼にとつて最も身近な架空の物語をも言及せざるを得なかつたのである。つまり、正統な歴史書には看取できない始皇帝妃の物語も、一蹴されることなく、漢籍の引用に次いで言及されるという柔軟な姿勢が見られるのである。即ち、往時、大陸の文學・史學に最も通じていた五山禪僧は、正統な歴史記述を把握した上で、虚構の物語を楽しむ別の一面をも有していたのである。かくのことき視点から見ると、抄中、更に注目すべき記述が見られる。

燕カラ秦ノ始皇ヲウタウドテ、タハカリテ、焚於其力首ト燕ノ國ノサシ岡、督亢ト云処ノサシ岡ヲ持テ、始皇ニ直ニミセマウシ、直ニ岡ヲワタシマウセウト云テ、荆軻・秦舞陽ノ二人力、

咸陽宮エイタソ、能ニスルコトソ

〔城闕門〕

喜（一五一—一五九三）の「燕太子丹図」賛の他にも、同じく熙

右文から室町後期、平曲とならんで謡曲「咸陽宮」が咸陽宮説話を人口に膾炙させた重要な要因であったことが今更ながら実感させられるのである。

更に、挿絵の重要性を鑑みても、咸陽宮の物語と絵巻の絵柄を繋ぐ上でも五山禪僧の果たした役割は看過すべからざるものがある。『花上集鈔』を繙くと、次掲、仲方円伊の「咸陽宮図」への賛が收められている。

咸陽宮図

仲方円伊

義々宮闕庄咸陽 義々たる宮闕咸陽を庄す

天半簫歌樂未央

天半の簫歌樂未だ央きず

有徳匹夫皆廟食

徳有れば匹夫も皆な廟食なれど

一坏無客酬秦皇

一坏、客の秦皇に酬ゆること無し

仲方の別集「懶室漫稿」は零本で、賛詩の製作年代は確認できな

い。しかし応永二十年（一四二三）という彼の没年からして、足利義教のもとから後園帝に「咸陽宮」図四幅が献上されたとい

う。『接納御記』の宝徳元年（一四四九）の記事を遡ることは間違いなく、室町時代初期から既に咸陽宮の画題が広く賞讃されていたことが裏付けられるのである。『翰林五鳳集』には、その他同題の天隱龍沢及び雪嶺永璽という室町中・後期を各々代表する詩僧の賛詩が採録されており、室町期を通じて親しまれたものであったことも窺える。しかし画題の定着という点では、雪嶺を始めとする室町後・

末期に顯著であり、仁如集堯（一四八三—一五七四）の「扇面荆軻秦舞陽咸陽宮上欲王図」賛や、別集「清溪稿」に收められた熙春竜

春の「阿房宮図」賛及び春沢永恩（一五一—一五七四）「枯木稿」所収の「扇面咸陽宮」賛など数多くの画賛が確認される。中でも熙春が杜牧作「阿房宮賦」の措辞を用いながら賛した「阿房宮図」、

六国平来帰二秦 歌台舞殿別「咸春」

堯楷三尺弃如土 徒愛「紛奢」不「愛」人

は別集の詩題注により南禪寺塔頭の方丈に描かれた襖絵であることが知られる。

さて、この時期の作品の注目すべき特徴としては、仲方・天隠に代表される前代の作例が咸陽宮の滅」という杜牧の傑作「阿房宮賦」に依拠した歴史的無常を眼目とするのに対し、

秦閑百二似無鎖 漏却燕丹亡國愁

角生頭白足何恃 龜背寄身安泰山

（春沢永恩「扇面咸陽宮」）

のとく、燕の太子丹に關わる説話を言及する点にある。こうした背景に「平家物語」のることは惟高の例もあり、黒田氏の指摘される通りであろう⁴⁾。しかし、なぜこの時期に画賛が多出し、燕丹を詩材として好んで用いるようになるのだろうか。それも往時、一方で「読秦記」（琴叔景趣「松隆吟稿」）や「讀阿房宮賦」（東山崇忍「冷泉集」）のごとく画題ではない場合には、前代と同様、杜牧賦に取材した作例に限定されることとは一線を画してである。

こうした事例からも、物語の一部を絵画化することが一般化し、それに付隨して、正統な歴史書とは齟齬を來す物語の細部も容認され、架空の作品として叢林のごとき知識階層にも親炙していくた時

代状況が裏付けられるであろう。更には仁如や春沢の贊のごとく、

咸陽宮物語が摺絵や扇面画の題材であったことは注視すべきである。

南禅寺には熙春賛の「太公望垂釣図」を含む扇面散らし屏風が現存

しており、前掲の摺絵「阿房宮図」も扇面画が元来であった可能性

がある。つまり、咸陽宮及びそれに付随する説話と画題との密接な

関係は、後代の草子屋の「咸陽宮」絵巻への参与の点からも見過し得ないものである。

扇面画・屏風絵等と五山僧の関係の画贊を通して緊密なることは確認するまでもないであろう。事実、徳田和夫氏には、「二十四孝の中の十二孝を描いた伝狩野元信筆墨画六曲一隻に貼付された惟高・仁如等五山僧の画贊が、慶長年間以前成立の長谷川信春画の絵巻二「二十四孝絵」の贊と共通することを指摘され、屏風絵に端を発した絵巻の存在を確認された例もある（『お伽草子研究』第二篇 お伽草子の展開、第四章「二十四孝」誕生前夜）。また、青山短期大学所蔵「咸陽宮」絵巻の箱には、扇面画を多数残した狩野派の絵師、狩野探信の筆を極めた紙片が貼付されているというのも示唆的である。

しかししながら、『咸陽宮』絵巻の成立に五山僧が関与していたと短絡する意図は決してない。如上の時代背景を踏まえて、正統な歴史記述とは異なる幾多の説話や平曲・能を十分に活用したであろう「咸陽宮」絵巻の特質を、漢籍受容の側面から考察することが本稿の目的である。

なお、「咸陽宮」絵巻の諸本については伊井春樹先生の御論稿があり、現在六本が示され、本文内容により二系統に分類されている。しかし先生の御指摘のごとく、書承等の前後関係には不明な点が多い。

く、現存本のみから祖本や古態を探ることは困難であると思われる。したがって本稿でも諸本系統に徒に拘泥されることなく、各諸本の中の特徴的な記述を考察の中心とする。

一

伊井先生による絵巻内容の十分類に拠ると、「平家物語」や謡曲

「咸陽宮」に拠らない「咸陽宮」絵巻の独自表現とみなしてよい部分に、冒頭①の秦始皇帝前史の記述がある。この部分、先生により『三国伝記』平仮名本との関係が指摘されているものの、一概には結論しがたい複雑な問題が存するのである。

この「始皇帝前史」は諸本を二系統で比較した場合、第二系統の二松学舎大学蔵本（以下、二松本と略称）・スペンサーコレクション本（以下、ス本）・信多純一先生蔵本（以下、信本）の三本が、六国滅亡・天下統一を始皇帝の所行として収斂し、始皇帝一代の伝記的側面を強めているのに対し、第一系統の穗久邇文庫本（以下、穗本）・大阪青山短期大学本（以下、青本）・専修寺蔵本（以下、専本）には始皇帝以前の戦国の七雄の攻防が委細に叙述されるという相違が見られる。しかもこの部分、漢籍利用の点でも興味深い問題を提示している。以下、青本冒頭部の記述を中心に検討していく。

青本の冒頭、書出は次のごとくである。

むかし、しんだむこくに、かんやうきうと申て、いかめしきたり立られし事ありけり。その時のいかとをは、しんのしくはうていとそ申ける。此みかとのせんそとぶらへは、そのかみ、ぐしゅんの御ときにはくえいといへるもの、君につかへ、民

をはく、むこうありしかば、そのとくをしやうして、ゑいしの
しやうを給はりけり。

第一系統の中で、始皇帝の先祖を創業の柏翳にまで遡つて記すのは
この青本のみで、咸陽城の創業者である孝公を以て物語をはじめる
専本との相違なども含め、注目される。青本を統いて言及する秦の
歴代は、柏翳の末孫の非子、非子の十二代の孫の繆公、繆公より十
四代にあたる孝公、そして惠王・武王を経た昭(襄)王、昭王の子
の孝文王、孝文王の子の莊襄王、そしてその子の始皇帝である。こ
の系図を史書と照覧するに、「史記」の記述をほぼ簡略化したもの
であり、概して矛盾する点はない。掲出された人物も、周王より領
地を分与され、秦を邑せられた非子を始め、名臣百里奚を士大夫に
遇し勢力を拡大した繆公、衛の公孫、商鞅を用い法を制定し他国か
らの夷狄の遇を脱した孝公、范雎を用い周を滅ぼした昭王等、的を
射しており至極妥当である。では青本の詞章が作成された際、「史記」
は當時机辺に参照されていたと見なしてよいのであろうか。

往時、「史記」は「索隱」のことき簡便な注釈書とともに読まれ
ていたことは桃源瑞仙の「史記抄」の引用からも明らかであるし、
或は「十八史略」を始めとする手軽な通史も広く行わっていた。胡
曾詩も初学向けの史書として最適であつたろう。類書の存在も無視
できない。実際、五山禪林にも宋代、黃繼善の編した初学的史書
「史提要」を講じた桂林德昌の抄物「燈前夜話」なども存在して
おり、浩瀚な「史記」原典に拠らずとも、青本のことき記述は充分
可能であったと思われる。しかし、「燈前夜話」に記される秦代の
記事は、柏翳・穆(繆)公・范雎が項目として掲げられるのみで、
青本の筆致とはほど遠く、直接的な関与は想定し得ない。また、
青本の筆致とはほど遠く、直接的な関与は想定し得ない。また、

「十八史略」と比較しても、非子・孝公をはじめ取り上げられた人
物や事蹟等は矛盾しないものの、言辭の面で近い関係にあるとは言
い得ない。

如上、かくも細部の詞章の一致にこだわる所以は、青本には原拠
を忠実に踏襲した部分が存するからである。即ち、秦の昭王と六国
の攻防の記述に於てである。青本の記述は昭王と六国の事蹟に至つ
て筆勢が一変し、詳細かつ躍動感溢れる印象的な文辭になる。

……(前略)……六こくとは、かんきそ、えん、てう、せ

いの六のくになり。六こくのしよこう、これをおそれて、日々
夜々に、くはいめいし、いかにもして、しんをほろほへきて
たてをなすといへとも、秦のいくさ、れんくにつよくなり、
南のかた、かん中をうはひ、にしのかた、はしょくをやふり、
ひんかしのかた、かうゆのちをさき、北のかた、ようかいのぐ

んをおさむ。……(後略)……
文中傍線部、一見して漢文脈であることの明らかなこの部分は、漢
代、賈誼の名文「過秦論」をそのまま和文化したものである。原典
当該部分を掲げると次のごとくである。

孝公既没、惠文・武・昭襄蒙_{故業}、因_{遺策}、南取_漢
中、西拳_{巴蜀}、東割_{腴之地}、北收_{要害之軍}。諸侯恐懼、
会盟而謀_弱秦。

〔古文真宝〕所収本文に拠る
賈誼「過秦論」は、「史記」の「秦始皇本紀」の末尾に引用され
るのを始め、「文選」にも採録された傑作であり、本国にあっても
古來、親炙していたと思われる。しかし「過秦論」原典の構成や文
辭には所収諸本により少なからず異同が存する。中でもこの部分、

〔史記〕所収の本文では第一行傍線部を「惠王・武王」とし、昭襄王に言及していない点は重要である。青本では昭王の事蹟として「過秦論」の詞章を利用していることを考へると、「古文真宝」との設定の一致は注目すべきものがある。また、「文選」では該当部分を「惠文・武・昭」とし、「古文真宝」に近いが、本国往時の流布を勘案し、以下の引用は総ての引用は「古文真宝」所収本文に依拠することとする。

さて、「過秦論」との一致は更に続く。四賢及び、六国の諸士を挙げる以下の記述である。

……〔前略〕……この時にあたつて、せいにまうしやうくん、

てうにへいげんくん、そにしゆんしんくん、きにしんれうくん

とて四君あり。これみなめいち、ちうしんのけんしんなり。

さて、ねいえつ、じよしやう、とかく、そしん、これみなむね

とのゆうしなり。そのほか、こし、そんし、たいだ、けいりや

う、わうりう、てんき、れんば、てうしや、これらは一人当千

のつはものなり。六わう、この人々にめいして、大ぐんをあひ

そへ、かんやうきうへむけられけり。……〔後略〕……

という青本の詞章は、

当此之時、齊有「孟嘗」、趙有「平原」、楚有「春申」、魏有「

信陵」。此四君者、皆明智而忠信、寬厚而愛人、尊賢而重

士。……〔中略〕……於是六國之士、有「寧越」・徐尚・蘇秦・杜赫之屬、為之謀、齊明・周最・陳軫・召滑・樓緩・

翟景・蘇厲・樂毅之徒、通其意、吳起・孫臏・帶佗・兒良・王廖・田忌・廉頗・趙奢之朋、制其兵。……〔後略〕

……

右掲「過秦論」の人名列挙に忠実に即している。さて、齊の孟嘗君・趙の平原君・楚の春申君・魏の信陵君の四君は、宋代、王応麟篇の名数集「小学緒珠」卷五、名臣類上に「過秦論」や「史記」列伝を出典として収録されるのをはじめ、「事林廣記」後集卷一・歴代類や「十八史略」卷一「春秋戰國・楚」などにも見え、唐土宋・元代には「四豪」或は「四賢」として慣用的に併称されていたことが確認できる。しかし、寧越・徐尚・蘇秦等が列記される例は他になく、現行類書等には掲らない「過秦論」と青本との直接的な関係が指摘できるのである。

また、六国を悉く平定し、阿房宮も完成し、満悦の始皇帝の言を記した、

ある時しくはうてい、あはうきうに出させ給て、よものけしき

を見おろして、のたまひけるは、くはん中のため、きんじやう千里、まことにしそん万世のこうなり、とよろこひ給ふ所に

……〔下略〕……

なども、「過秦論」原據の記す始皇帝の言、

始皇之心、自以為、關中之固、金城千里、子孫帝王、万世之業

也。

をそのまま書き下したものに他ならない。

「過秦論」利用の観点から、他の諸本に目を向けると、第一系統諸本の冒頭部で文辭の一致するのはすべてこの「過秦論」に拠つた部分であることがわかる。即ち、専本の、

……〔前略〕……ねいえつ・じよしやう・そしん・とかくなど
云ちほうのたつしやあつまりて、日夜心さしをはけまし、はかりことをつくしつ・つゐに、こし・そんし・たいた・けいり

やうなどいふ名しやうに百万きのつはものをあひそへ、へいけんくん・しゆんしんくん・しんれうくん・まうしやうくん、この四君を大将として、しんのくにをほろほさんために、かんやう宮にそおもむきける。

及び穂本の、

この時にあたつて、齊のまうしやうくん、てうのへいけんくん、そのしゆむしんら（「く」の誤りか）ん・きのしんれうくん、此四人は、めいちゅう長なり。しんけつなり。をのくちほうをめくらし、人をなつけ、衆をいさめて、長子・そんし・けいりやう・れんはなといふしやうくんに、百万のしそつをあひそへて、秦のみやこをせめさしむ。

の記述などは、人名配列が多少異なり、青本のように忠実な翻案ではないものの、四賢や六国の諸士を列挙する上で「過秦論」を参照していることは間違いないであろう。

同様に、第一系統本冒頭部との関係が指摘されている「三国伝記」平仮名本、巻二の第八話「秦の始皇帝、六国を并呑し給し事」との一致部分⁽⁸⁾、実はこの「過秦論」を踏まえた記述に他ならないのである。当該部分を挙げる。

……（前略）……この時、せいの孟嘗君、趙の平原君、楚の春申君、魏の信陵君、この四君は、みな明智にして、ちうしんあり。くわんこうにして、人をあひせり。けんをたつとみ、しをおもんする。

然るに、しんの孝公、かんこく、二鷲のようかいを、かまへて、いきほひをふるひ、六国をほろほさんとす。これによつて、六国の中、たかひに、心さしを通して、しんをほろほさん事を、

あひはかり給。この時、六国に、寧越、徐尚、蘇秦、杜赫、陳軫、翟京とて、ちりやくのすくれたるめいしん有。吳起、孫臏、帶他、児良、王廖、田忌、廉頗、趙奢とて、ふりやくのすくれたるゆうし有。これらのともから、あひともに、はかりことをめくらし、つはものをとゝへて、百万のくんせい、しんにせめよせ、あひた、かふ。……（後略）……

（三国伝記）

列挙するのは人名のみだが、最も詳しい青本さえも省略する六国士の陳軫、翟京の名を挙げる等、より原拠に近い所も見せている。更に、「咸陽宮」絵巻第一系統諸本と「三国伝記」を比較するに、専本の前掲引用文に統く本文、

しんわうこのよしを聞給て、はつき・もうてんなといふしやうくんに五十万きのつはものをあひそへ、かんこくの閑をひらきて六こくのいくさをまねき入、ふせきた、かはしむる所に、

……（下略）……

の後半部、「六国の兵を迎討つ秦軍が函谷閑を開いて応戦した」という展開は、原典の「嘗以什倍之地、百万之衆、仰閑而攻秦。秦人開閑而延敵。九国之師、遁逃而不敢進。」に拠つたもので、文辞は異なるものの第一系統本にも共通する内容である。だが前半傍線部、「はつき・もうてん」が登場するのは諸本の中で専本独自の表現となっている。「はつき・もうてん」は「白起・蒙恬」で、共に秦の名将であるが、武安君、白起が昭王の時の臣下であるのに対し、蒙恬は始皇の世代の将軍という年代的矛盾をはらんだものとなつてゐる。しかし「三国伝記」にも同様の混同が行わかれているのである。やはり先掲本文に統く部分に、

秦王、則、白起、蒙恬、内史勝以下の將軍に、おくまんの衆を

そへて、くわんをひらきて、六國のくんせいを、おひき入、しきりにた、かひをなさしめけるに、六國のつはもの、みな、ことく打ほらされて、のこるともからは、すくなし。……

（後略）……

とあり、文辞はかなり異なるものの、「白起・蒙恬」という重要な語句での一致が見られる。年代的矛盾ということを問題とすれば、

米沢本「詩学大成抄」時令門で、「狐白裘」の注として、「始皇ノキサキノテウホウガラレタソ、齊ノ孟嘗君カヌンタコトアルソ」と記し、穂本同様、孟嘗君を秦の昭王ではなく、始皇帝時代の人物と誤るのをはじめ、岩瀬本「詩学大成抄」節序門でも、秦の孝公の臣下、商鞅を「秦ノ始皇ノ時ニ商鞅ト云者」とする例もあり、必ずしも稀ではない。しかし「韓信・白起」や「白起・王翦」を並べる例はあつても、「白起・蒙恬」は他に見出せず興味深い一致となつてゐる。

「過秦論」の如き正統な漢籍が、「咸陽宮」絵巻の詞章に引用される契機としては、「三国伝記」の「とき説話を介在させたくなるが、既に検分したとおり、文辞の点での緊密性はなく、先に掲げた青本の、惠文・武・昭襄の各王が奪取した東西南北の地名の忠実な翻案等、「三国伝記」では見られない原拠の利用も「咸陽宮」絵巻には確認されるのである。

「過秦論」原典では、秦軍の攻撃の激烈かつ悲惨なるを「追亡逐北、伏尸百万、流血漂」櫓」と表現する。即ち、倒れ伏した屍の数は百万、流れる血の量たるや、櫓を浮かべ漂わすほどであったとしている。この場面、「三国伝記」には見出せないものの、青本

で、

みたれあふてた、かふほとに、なかる、ちは川をなし、ほろふるかはねは山をなす

とあるのを始め、専本の、

しんのいくさつよくして、六こくのた、かひやふれしかは、うちほろほさる、事かすをしらす、ち大河をなかしてたくをた、よはし、かはねはかうかくとなつて行かよふみちもなし

右引用の傍線部、或は穂本の、

あはれなるかな、六國のつはものは長途に馬のあしをつからかしけるゆへに、た、かひつかれてすぐにいくさにかけまけり。なかる、血はたてをた、よはし、ふせるかはねは山とそなれる傍線部のごとく、より原拠に近い文辞になつてゐるものもある。しかし、その表現を比較しても、青本と専本を折衷したものが穂本に最も近い等、「三国伝記」も含めた諸本相互の関係は不明で、原拠「過秦論」を各々利用していることを指摘できるに留まる。

二

そうした中で先述のごとく、青本は他本に比べて「過秦論」原典の表現に最も忠実で、直接「過秦論」を参照しつつ詞章をなしたかのごとくである。「不老不死」絵巻の作者が、仏典を比較的忠実に翻案しながら冒頭天竺部を完成させたのと同様な趣向⁽⁹⁾が、この「咸陽宮」絵巻青本でも行われているのであろうか。その結論を下す前に今一度、青本冒頭部、秦の歴代の記述を検分したいと思う。

青本の歴代秦王の記述が、正史に比しても、ほぼ正鵠を射ている

ことはすでに述べた。しかし、青本には、「過秦論」に扱りつつも、独自の増補を行った興味深い部分がある。即ち、六国の諸侯が会盟し、謀策をめぐらした次の記述である。

これによつて、せいのひんわう・えんのせうわう・てうのけいふんわう・そのきやうわう・かんのきわう・ぎのせうわう・すべて六わう・心さしをおなしうして、一天四かいのゆうしをまねき、ちうほうをおしますしきやうして、しんをまよはさんはかりことそめくらされける。

「過秦論」が、

諸侯恐懼、会盟而謀弱秦。不愛珍器重宝肥饒之地、以致天下之士。合從締交、相与為一。」とするのに大略依りながら、青本は原典にはない六国の王の名、齊の閔王・燕の昭王・趙の惠文王・楚の頃(襄)王・韓の釐王・魏の昭王を総て列挙するのである。この列記は「史記」や「十八史略」で確認できないのをはじめ、「三国伝記」・「太平記」諸本や「史記抄」・「古文真宝抄」等本国の抄物にも見出せないものである。強大な秦に対抗する六国の会盟や合從・連衡を最も詳しく記すは「史記」の「蘇秦列伝」である。しかし、蘇秦が尽力し、合從を成立させたのは秦の昭王の一代前、惠王の治世であり、この考えを進言したのは韓の宣惠王・齊の宣王らに対してであった。燕等、すでに王位の代わっている國もあつたが、青本に記される六王の列挙は文中見出せない。だが、蘇秦以後も六国の密約は屢々行われたことは、「戦国策」を繰いても、各国の連合軍が秦と干戈を交える記事がしばしばあり、これを以て青本を誤りとすることはできない。逆に、この六王は青本の記す秦の昭王の時に在位していたことが

「史記」の卷十五、「六国年表」によつて確認されるのである。それだけではない。趙の惠文王は平原君を用いた國王であり、春申君は楚の頃襄王の、孟嘗君は齊の閔王の臣下であり、信陵君は魏の昭王の末子である。何等矛盾は存在しないのである。

如上、青本は整合性に留意しつつ綿密な調査を以て歴史を叙述している印象を与えるが、留保すべき点もある。一例を挙げると、青本は秦の孝公を「それ(繆公)より十四代にあたるをは、かうこうと申す。」と記す。繆公から孝公に至る歴代の事蹟を簡略化しながら述べるのは、「史記」「八史略」等、唐土の史書も同様である。しかし、「十八史略」では、繆公から孝公に至る歴代を、康公・共公・桓公・景公・哀公・惠公・悼公・厲公・共公・躁公・懷公・靈公・簡公・惠公・出子・獻公として十六人列挙し、孝公を十七代目としているのである。一方、「史記」の紀伝をまとめる、康公・共公・桓公・景公・哀公・惠公・悼公・厲共王・躁公・懷公・靈公・簡公・惠公・出子・獻公の順である。「十八史略」は厲共公を二公と誤認する誤りを犯しており、その点を考慮すれば、「史記」と同一で、孝公は十六代にあたるとするのが正しいということになる。ではなぜ青本では十四代としたのであろうか。

六国の諸王の名を正確に記すことは異にするこうした筆致は更に一例看取される。秦の繆公の重臣、百里奚に関する記述である。青本では、

されは、この(繆公の)ときそかし、申屠はくりけいなんと、いふ、めいよのものとも、わか君のくにをすて、ほつこうのしんとなり、まつりことを、かしこくおこなふかゆへに、くにのいきほひ、けう大になりにけり。

として、傍線部、「申屠はくりけい」と連記する。「めいよのものと
も」とあり、申屠・百里奚を相異なる二者と解しているのは一目瞭
然である。だが、その場合の申屠が問題である。

「申屠」は複姓である。したがってこれのみで特定の一個人を示
すことはできない。その中で、唐土春秋戦国期までの「申屠」姓と
いえば「莊子」外物篇や「韓詩外伝」にもその名の見える申屠狄
（「屠」）と「徒」は通韻）が最も著名であろう。しかし「莊子」に拠
ると、申屠狄は諫言の聽き入れられざるために石を背負い自ら河に
身を投じた狷介の人とされるものの、その在世は記されていない。
当然、「史記」の「秦本紀」には見られない。ではなぜ青本は殊更
漢字表記を以て具体的に「申屠」の姓を記したのであろうか。

それに注目して、「史記」を繙くに、申屠狄の名は「魯仲連・鄒陽
列伝」の中に「是申屠狄自沈於河」という文辞で登場するので
ある。この部分、注釈書を参照すると、「集解」が「漢書音義曰、
殷之末世人」として、申屠狄を殷人と解するのに対し、「索隱」で
は「申屠狄。按『莊子』、申屠狄諫而不用、負石自投河、韋昭云、
六国時人」とあるように、「申屠狄」の表記の点でも青本と一致す
るのを始め、在世を殷ではなく、六国の時代と記すのは重要である。
また、この「魯仲連・鄒陽列伝」では申屠狄に次いで百里奚の逸話
が引かれているのである。

百里奚は元来虞の人で、後、齊に捕らえられ繆公の夫人の媵（嫁
ぎ先に従附する臣下）となり、秦の繆公に用いられる所となる。し
かし、これについて清代の梁玉緯は「史記志疑」の中で、「晉世家」
では井伯・百里奚と連記されたことで実際媵とされた井伯が百里奚
に誤たれて伝えられたことを指摘しているのは示唆的である。即ち、

正史にあつてもこうした本文の混同は少なくなく、後人、特に日本
にあつては齟齬が生じやすかつたであろうことは想像に難くない。
おそらく「魯仲連・鄒陽列伝」のごとく、申屠狄と百里奚を列記す
るような場面、或はそれを引用する何らかの類書か抄物で「索隱」
を敷衍させたごとき内容を持つものに引かれて二者の名を誤つて連
書してしまったとは考えられないだろうか。

「史記」等の史書で百里奚と並称される繆公の臣下には、後世
「二老」と称される蹇叔がいる。「秦本紀」又は「十八史略」に充分
通じていたのであれば、青本のよう「申屠はくりけい」などとす
ることはなかつたのではなかろうか。歴代を十四代とした記述とあ
わせて、些細な点であるとはいえ、青本冒頭部の性格を考える上で
看過できない重要な問題を含んでいると思われる。やはり青本の詞
章作成にあたっては、「史記」や「過秦論」（古文真宝）を直接利
用したと短絡するのではなく、こうした誤解を生じさせるような何
らかの注釈書を用いていると考えるべきではなかろうか。それも室
町末から近世初期にかけて、五山禪林で行われていた講説に劣らな
い高い水準の抄、或は手控えの存在が想像されよう。

「平家物語」とは一線を画す、室町時代物語の「咸陽宮」絵巻の
世界を探る上で、第一系統本、特に青本の冒頭部は刺激的である。
物語が進むにしたがつて、伊井先生も指摘されるごとく、「源平盛
衰記」や「太平記」などの類話をほぼ完全に踏襲していく姿勢とは
異なり、この冒頭部の歴史叙述は名文「過秦論」を翻案することで、
漢文特有の韻律の躍動感をもたらしている。参照したのは当然「過
秦論」のみではないにしろ、「三国伝記」を含めた室町期の咸陽宮
物語の一系統が賀誼の傑作によって収斂されることは留意しなけれ

ばならない。

三

秦の治世を論じた作品として賈誼「過秦論」に劣らぬ傑作に杜牧の「阿房宮賦」がある。既掲、五山僧の詩題にも「讀阿房宮賦」とあるのをはじめ、禅林の杜牧賛でも賦中の語句がしばしば引用されることとは拙稿で述べたことがある。つまり「過秦論」以上に人口に膾炙していたといつても過言ではない作品である。したがつて室町時代物語である「咸陽宮」絵巻の詞章に多大な影響を与えていてもよさそうであるが、文辞の上での近似性はさほど強くはない。しかし、その中で、「過秦論」に扱っていない第二系統本にその影響が看取できることは大変興味深い。

ス本では咸陽宮の偉容を述べ、阿房殿の豪華な装飾を記した後、始皇帝の後宮に言及する場面が続いている。

① 後宮の女御更衣、その数又おほく、秦王の愛幸をまちて寵せられることをもとむ。② あしたに鏡をたて、おもてに脂粉をほど（二）す。霽天の星の雲にみゆるかとあやしまる。③ 髪をけずる櫛の音擾々として雲にひき、蘭麝をたく煙のすえはよこたはりてかすみに似たり。④ 脂粉青黛をあらひすつれは、涇渭の水はさながら流れを濁らかす……（下略）……

第一系統本には見られない、唐土の伝統的「宮詞」を意識したが如き優艶な措辞であるが、こうした「過秦論」にはない後宮の表現が「阿房宮賦」には見出せるのである。

⑤ 明星焚焚、開粧鏡也。⑥ 緑雲擾擾、梳曉鬟也。

⑤ 潤流張膩、棄脂水也。⑥ 煙斜霧橫、焚椒蘭也。

雷霆乍驚、宮車過也。轆轤遠聽、杳不知其所之也。

一肌一容、尽態極妍。⑦ 縱立遠視、而望幸焉。

有不得見者、三十六年。

（古文真宝）後集所収本文に扱る

番号を付した傍線部の表現が各々対応しており、この部分、第二系統本は「阿房宮賦」を下敷にしていると考えてよいであろう。この描写をはじめ第二系統本の秀麗な文体は、製作者の「史記」等唐土の歴史・文学に精通した学識と美意識を実感させる優れたものであり、正統な出典を想定させるが、「阿房宮賦」との関連に限れば他は管見では確認得ない。

如上、詞章の出典を中心にして「咸陽宮」絵巻諸本の冒頭部を確認してきた。各系統が室町期に五山禅林を中心に入口に膾炙した「古文真宝」所収の二作品、賈誼「過秦論」と杜牧「阿房宮賦」の受容の相違で大別されることは大変興味深く、その上で当然「古文真宝抄」との関係が想定されるものの、彦龍抄・桂林抄等管見では「咸陽宮」絵巻に与えた影響は見出せなかつた。また、二系統の諸本間でも第一系統の專本・穂本のみに見られる、戦乱の世の反定立として掲げる聖帝・賢帝の御代を讀えるという設定が、文辞は全く異なるものの第二系統本に見られる等、その相互関係には多くの疑問が残されている。そこで以下では更に「咸陽宮」絵巻の製作背景を探るべく、第一系統本の物語構成の目を転じていきたい。

「咸陽宮」絵巻諸本で、文辞のほぼ一致する第一系統の三本であるが、その結末は一様ではない。三本には田光先生譚以下の中巻に相当する部分が欠落していること、下巻には他本にはない項羽の咸陽宮攻撃と秦の滅亡、更には項羽の敗退、劉邦による天下統一までもが記されていることは、伊井先生の御指摘の通りである。三本と同系統の二松本が、荆軻・秦舞陽の始皇帝暗殺の不首尾、及び「史記」の「刺客列伝」を典拠とする高漸離の後日譚を記し、「只天うんのつよき始皇帝のくわほうのほこそめてたけれ」という祝言を以て物語を終えることを考慮して、下巻とのつながりから、中巻相当部分には第一系統の青本・專本に見られる徐福譚や始皇帝の薨去、臣下である李斯・趙高の勢力闘争、趙高の奢りと二世皇帝の暗殺、三世子嬰の擁立、といった要素が組み込まれていたことが想像に難くない。即ち、「云云亭」・「長城」・「阿房宮」・「東海」・

「沙丘」・「咸陽」・「上蔡」・「殺子谷」・「輶道」という「胡曾詩抄」の秦史に関する詩題とその内容、及び「烏ノ頭白」・「不死ノ薬」・「指鹿云馬」と続く「連集良材」の秦についての記事を勘案したことである。歴史上の故事に由来する詩題をほぼ時代に沿つて配置する「胡曾詩」の初学書としての室町時代の文学における役割は屢々称揚される所であるし、一方の「連集良材」からは、

絵巻の製作からも決して隔絶しているとは思われない連歌師の一般的な漢故事の知識が窺われる所であるが、その両書が秦の滅亡に至る大筋で一致していることから、五山詩僧の詩題にもしばしば見え

る、往時の「秦記」とはかかる要素を満たしていたと考えられるのである。そして、これだけの叙述内容を網羅しようとすれば、三本の中巻部分は二巻には相当し、元来は全四巻にも及ぶ長大な絵巻であつたと考えられる。ではなぜ、同題を掲げる絵巻の中でこれほどまでに結末が異なっているのだろうか。当然、草子屋の意図が大きく関与しているであろうことは言うまでもない。これほど多くの諸本が存在していること、更に城殿が制作に乗り出していることから考えて、近世初頭、「咸陽宮」絵巻が必要の多い作品であったことは間違いない。それは、物語自体が見せ場に事欠かない上に、始皇帝への賛美で物語を終結させることにより、「文正草子」や「不死」に共通する祝言物の体裁を整えることが可能だったからであろう。青本や專本に見られる徐福譚を付加することにより、その祝言的色彩はより強固なものとなる。その意味で、物語の終末は、絵巻の依頼者（読者）と制作者との個別の事例により流動的に変わり得るものであったとも考えられる。その中で、長大な原「咸陽宮絵巻」を想定させる三本の存在は重要である。

三本の下巻、項羽と劉邦の死烈な攻防を描く文辞は、「太平記」版本の巻第二十八、「慧源禪閣南方合体の事、付けたり漢楚合戦の事」にほぼ一致を見る。その「太平記」の記述自体が「史記」の「項羽本紀」・「高祖本紀」に拠っているので、「史記」との関係の密接な三本であれば、特に「太平記」を介在させる必要はないとも考えられる。しかし、三本が祝言を以て物語を閉じることは実は他本と同様なのである。しかしその祝言は秦始皇帝に向けられたものではなく、劉邦の臣下として天下統一に尽力した張良の功績をたたえるものとなっている点が他の諸本と大きく異なっている。その部

分を挙げておく。

……『前略』……漢の高祖いくさにうちかち、天下すみやかにおさまり、漢の世つたはりて、七百年をたもちしことは、これしかしながら張良がはかりことよりおこれり。そもそも張良は、みづから手にかけてほこをあり、いくさをせしこと、一度もなし。たゞはかりことをむねとして、かたきをたいらげ、天下をおさめたり。されば、漢のかう祖のいはく、はかりことを帷帳のうちにめぐらして、かつ、ことを千里の外に決せしものは子房なり、との給ひけり。そのかほかたち、たけからず、いかにもゆうにうつくしく、さながら児のことくなれとも、そのちゑふかくして、はかりことは天下におこなはれて、忠臣良将のほまれをば、いまの世までもつたへたり。さて、下の橋に圯ておきなにけいやくせしことく、十三年の、ち穀城山のふもとにして黄なる石をもとめて、つねにこれをまつりしが、のちに赤松子といふ仙人にしたがひて、長生不死の素をなめ、こんろん山のぼりつゝ、西わう母ともろともに、ともに命をたもちけるとかや。

單に漢の高祖を讃えるだけでなく、張良にまで言及することに如何なる意味があるのだろうか。実は、そこに室町期に一般化した新たな史観の影響が看取できるのである。即ち、「顛麿蹶項」がそれである。

室町後期の抄物で桃源瑞仙の説を聞書した『蕉窓夜話』に次の項目がある。

嬴顛蹶、如転眼、赤精之子已竜與此句ハ漁梁集ト云モノニアリ。元朝ノ末ノ集ソ。主ハ無ソ。常ニハ嬴顛劉蹶トアルソ。甚

ノ詩ニモ作タソ。項蹶ハメツラシイソ。嬴ハ秦ノ姓ソ。項ハ項

羽ソ。始皇モ項羽モ亡テノケタソ。顛倒シ蹶ヤウナソ。サウシ即ち、「顛麿蹶項」とは元来、韓愈詩等の古典に見られた「嬴顛劉蹶」たる定型句を改めた唐土、元末の『漁梁集』なる詩文集所収

の上の「聯」によつて本国にも齎された新奇な表現であるというのである。「嬴顛劉蹶」は、秦（嬴姓）・漢（劉姓）両朝の衰亡の歴史を述懐するものであった。杜牧「阿房宮賦」に相通じる無常観である。

一方、「顛麿蹶項」（項は項羽）はその單なる変型に留まらず、「蕉窓夜話」で記すことく、宋代、羅大經著『鶴林玉露』の次の記述を契機に、更に新たな詩題を喚起させる重要な表現として理解・受容されるようになつたと考えられるのである。

自「古豪傑之士、立業建功、定変弭難、大抵以無所」為而為之者為高。三代人物固不待言、下此……中略……
張子房、顛麿蹶項而飄然不_レ待言。皆足_ニ以高出秦漢人物之上。左太冲詩云、功成不受賞、長揖帰田廬。……（後略）

（地集卷之四「功成不受賞」）傍線部のように、「顛麿蹶項」は高祖ではなく、劉邦臣下の名将、張良の偉業として解されている。即ち、大きな歴史の転換を一人の人物の所業に、それも一臣下の勳功に収斂する史観の象徴として用いられる表現であることが窺えるのである。それはやはり「蕉窓夜話」で言及される「暮ノ詩」に拠つても明らかである。

「暮ノ詩」とは明初成立の元詩の総集『元詩体要』所収、黃晋卿

の七絶「四皓囲棋図」賛を指すのであろう。

四皓囲棋図

黄晋卿

結

当局沈吟只謾勞

区勝敗直秋毫

顛嬴蹶項非君事

賴有安劉未著高

本国における「四皓囲棋図」賛の受容と展開については拙稿をもしたことがあるので説明の繁を省くが、本国禪林詩壇における商四皓材の詩作が橋中仙や王質の説話に附会され、時代を降るにしたがつて陳套化していく状況を以前述べたことがある。その際、商山四皓を惠帝の補佐役として招いた張良の功績に注目し、天下安泰の礎を築いた偉人として詩中に詠み込むことが一つの眼目として捉えられるようになっていく過程を指摘した。こうした史観が、「史記」の「留侯世家」の物語性豊かな叙述と相俟つて、「崑崙山に登り西王母と共に命を保つた」というような「史記」の枠組にはおさまらない数多の説話の源泉となり、例えば謡曲や幸若舞曲の詞章等に結実していったのである。

即ち、斯本のように戦国の歴史を語るに当たり、張良を以て物語を結ぶことは、唐土の影響のもとに育まれた正しく室町時代禪林的な史観を踏まえたものとして称揚されなければならないのである。したがつて、「咸陽宮」絵巻第一系統は本来、斯本のようないくつかの都合に応じ流動的に切られ、そして現在、三本が残つたものと思われる。

諸本冒頭部及び、スペンサー本の長大な後半部を通し、「咸陽宮」絵巻の室町時代的侧面を探求してきた。そこには当然室町期における「平家物語」や「太平記」の受容の問題等があり、簡単に結論付けることは難しい。しかし、絵巻の詞章が、「過秦論」や「阿房宮賦」といった「古文真宝」所収の言辞を参照していること、更に、「平家物語」の枠組に捕らわれることなく、「顛嬴蹶項」という新たな史観に裏付けられた壮大な歴史物語に転化させていったことは、物語の中でも一際興味深い作品になつてゐるといえる。

諸本の絵柄、個々の説話の異同等考察すべき面は多い。それについては、稿を改めて考察を深めたいと思う。

注

(1) 黒田彰氏著「中世説話の文学史的環境」(和泉書院) 所収「咸陽宮覚書」—朗詠注との関連—

(2) 「抄物と能作者」(『橋香』三〇・五)

(3) 岡見正雄氏「御草子」(『講座日本文学6 中世編II』(三省堂)、伊井春樹先生「『咸陽宮絵巻』諸本とその性格」(『国語と国文学』平成四年四月)でも【接觸御記】の記事を用いて考察されている。

(4) 注(1)と同じ。

(5) 伊井春樹先生「『咸陽宮絵巻』諸本とその性格」に據る。

(6) 注(7)に同じ。

(8) 一方、第一系統本のごとく秦史を始皇帝伝に収斂することの典拠としては、元代、作者不詳の「全相平話」の一、「秦併六国平話」が「秦始皇伝」の副題を有することから注目される。胡曾詩を文中、屢々引用する点が本国の嗜好

と一致している上、様々な異説を含む全相、即ち全頁挿絵入りの上図下文のこうした講史書である平話の「咸陽宮」絵巻の成立への関与を想定し、検分したもの、全五種の平話の中でも「秦併六國平話」は最も史実に近く、所載の燕太子説話も特に注目すべき設定はなかった。また挿絵と絵巻の絵柄の一致も管見では見出しえなかつた。

(8) 注(5)に同じ。〔三国伝記〕平仮名本の引用は古典文庫本に據る。

(9) 福田安典氏「竹齋の周辺」〔語文〕第五九輯) に挿る。

(10) 挿稿「一休宗純の杜牧賛について」〔語文〕第五三・五四輯)

(11) 柳田征司氏が論稿「辞書・事典に連続する抄物群—詩文作成のための抄物の場合—」(辞書・外国语資料による日本語研究 和泉書院)で紹介された慶長七年(一六〇二)梵舞等筆「史漢物語」も「咸陽宮」絵巻の成立を考える上で注目される。「一誠堂古書目録」第六号(昭和六一・六)に掲載された斯書には、「秦孝公事刑法過分亡國」「秦皇漢武奸事」「秦始皇事封禪松樹授位」「趙高指鹿称馬事」等の秦代の逸話が収められているという。現在、所蔵を確認得ないため、詳細は不明だが、「史漢」という抄物に頻出する語彙を冠した書名を含め、考慮する必要があるだろう。

(12) 挿稿「本国禪林における権現説話の受容について」〔中世文学〕第三六号)

(13) 張良説話の広がりといふ点では、万里集九(一四二八一不明)の別集「梅花無尽藏」卷第七所収「開基輔賛詩序」の中の「得赤松子之説。至三国之時、自号大玄童子。」という典拠未詳の興味深い逸話への言及も注目される。

—本学大学院博士後期課程在学—